

山室恒民の筆を祀る
岡田 乙 軍平

私の父は若いころ岡山の救世軍に通ったこともあったのですが、教会のない故郷の哲多町（現・新見市）に戻ってからは、「地元の人と共にあったから」とと悩んだ末、キリスト教を標榜せずに生きていました。私が倉敷の学校に勤めていた時には、「山室軍平の親戚ならぜひ来なさい」とクリスチャンの用務員さんに誘われて、倉敷教会に行き、教会で歌を歌うのが楽しみでせつせと通いました。また義母の芳野が神様のよくな人だった影響も大きかったようです。夫が岡山で電気店を開業し、岡山で生活するようになってからは、

岡山教会に属しました。けれども、教員をしている間は、休みの日にも教材研究があり、なかなか教会に通うことはできませんでした。定年退職後、都市計画で立ち退かなくてはならなくなり、夫の地元に戻って古い家に住みました。その家は、高梁教会のすぐそばです。それから熱心に教会に行くようになり、私の信仰は高梁教会の方に育てていただきました。キリストを信じることの喜びを教会を通して味わっています。

また、高梁教会で、「聖句書道」（写真左下）に出合いました。小野正江先生のご指導で、私の信仰は大きい影響を受けました。聖書の言葉を書き出すのですが、どのように入聖書を読んだらいいか、ということまで教えてくださいました。字の上手下手というより、その聖書の言葉が私や仲間を生かしてくれました。残念ながら小野先生は、三年前スキルス癌で召天されました。



「恐れるな。氣力を失うな。あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。救いの勇士だ。主は喜びをもってあなたのことを樂しむ、その愛によって安らぎを与える。主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる」（ゼバニヤ書3章16〜17節新改訳聖書）

私は、七十七歳で運転免許を取りました。その時も「神様、神様」と祈りながら必死になって自動車学校に通いました。夫が心臓の手術をしたので、運転中に具合が悪くなっても助けられるように、と思っただけです。ある時、自動車学校行きのバス停で待っていたら、高齢なので路線バスと間違えていると思われ、声をかけられました。

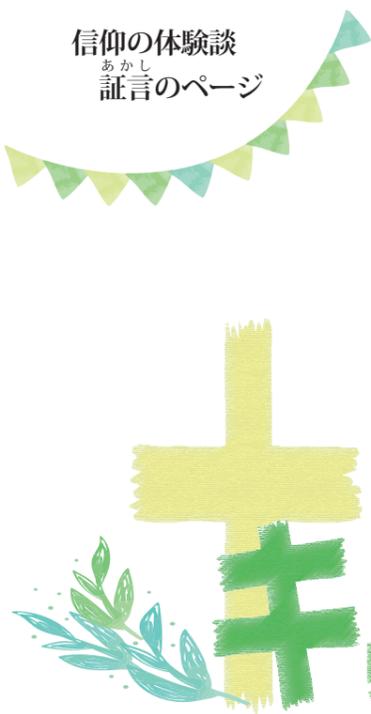
「はいはい、自動車学校に行くんですよ」と答え、びっくりされました。

運転免許の試験を受ける日、私は不思議な虹を見ました。その虹は自分を追いかけてくるようで、自動車学校の所で止まりました。不思議なことがあるものだと思いますが、良いこととありますが、良いことがありそう、と思っただけのところ無事試験にパスしました。今は息子が一緒に住んでくれるようになり、車に乗せてくれます。

ギャラリー横屋は、岡山に戻って新しい家を建てる時に、絵を愛する方たちが、少しでも安く作品を発表できる場所になればいいな、

定年退職後、自動車免許を七十七歳で取
得しました！

私の父は若いころ岡山の救世軍に通ったこともあったのですが、教会のない故郷の哲多町（現・新見市）に戻ってからは、「地元の人と共にあったから」とと悩んだ末、キリスト教を標榜せずに生きていました。私が倉敷の学校に勤めていた時には、「山室軍平の親戚ならぜひ来なさい」とクリスチャンの用務員さんに誘われて、倉敷教会に行き、教会で歌を歌うのが楽しみでせつせと通いました。また義母の芳野が神様のよくな人だった影響も大きかったようです。夫が岡山で電気店を開業し、岡山で生活するようになってからは、



聖子さんが描いた、
夫 誠さんの絵と共に
(ギャラリー横屋で)



ギャラリー横屋 オーナー
横屋 聖子さん

私は、戦争中に師範学校に入學しました。ところが、岡山大空襲で学校は焼失し、勉強しようにも場所がないような状況でした。紆余曲折はあったのですが、どうにか小学校の教師になりました。

両親が教師をしていたこと、父が教師をしながら洋画家の児島虎次郎に師事し、油絵の指導を受けていたことは、私の人生にも大きな影響を与えました。

夫の誠と出会ったのも、絵を習いたいと大原美術館のある倉敷の小学校に就職し、河原修平のデッサン教

室に通った時でした。夫は、クリスチャンの家庭に生まれましたが、信仰はもっていませんでした。けれども、私は義母の芳野の信仰者としての生き方に魅かれました。義母は決して贅沢せず、質素を常としていました。

横屋家で最初にクリスチャンになったのは、岡山県高梁にいた亀という女性です。亀は無口でしたが、気丈な人だったそうです。亀の父譲之助（幸喬）は、松山城の無血開城にあたり、藩主の名譽を守るため切腹覚悟の交渉に加わった逸話をもつ豪快な武士でした。亀が入信した当時は、廃藩置県で心の拠り所を失った武士たちが、教会に精神的な支えを求め、教会の信徒も増え始めていた頃でした。まわりの人たちからは教会に石を投げ込まれるなどの迫害を受けていました。

女性教員として、男性同様の待遇
を求めて戦った日々

JR岡山駅西口を背に歩いて約五分。交差点の角にあるビルの二階に、「ギャラリー横屋」の看板が見えます。ギャラリーのオーナーは、美術を愛するクリスチャン。美術愛好家の作品をたくさんの方に見ていただく場所を、と約十年前にオープンしました。オーナーの横屋聖子さんからお話をうかがいました。



(後列左より) 聖子(長女・本人)、父 山室恒民、三女、次女。(前列左より) 母と四女、祖父 山室峰三郎(軍平兄)、長男、峰三郎後妻。昭和22年頃撮影

亀を信仰に導いたのは、日本の救世軍で最初の士官（伝道者）であり、私の大い父、山室軍平でした。軍平は救世軍に身を投じる前に、高梁で一人、路傍伝道をしていました。この時、亀は赤ん坊だった義父の憲を背負って聞いていたそうです。亀の孫との結婚に、なんとも不思議な縁を感じます。

今も、私の手元には、軍平が一言添えて私の誕生に贈ってくれた小さな聖書があります。（写真次ページ左上）

夫は、教員をしていましたが、音楽が好きで、スピーカーに夢中になり、電気店を始めました。資金がなく、空き箱を積み上げたお店でした。私は長男の出産後も教員を続け、子どもは、義母にみてもらったり、夫がみたり、苦労しながらもなんとか育ててきました。

授乳中は、夫の店で番をしていたおばちゃんや学校に息子連れて来てくれ、用務員室の隅で授乳しました。また、熱を出している息子を置いて仕事に行く姿を見た隣人に、鬼のような母親だと言われたこともありました。とにかく必死に仕事と子育てをしていました。

ある日曜日に私が家にいると、息子が、「家にはお母ちゃんがいるんでえ」とお友達に自慢しているのです。お友達は、当たり前前じゃないかという表情でしたが、私は涙が出ました。本当に辛かった。今、思い出して涙が出てくるようです。

とはいえ、女性教員の立場を男性と同様に、と女性教員で励まし合い戦ってきました。私の母の時代は、女性が結婚して教員を続けるには大変な犠牲が伴いました。産休代金を自分で探し、給料も仕事着も用意しなければならなかったそうです。男女平等の運動をする先生はいじめを受けることもありました。転勤させられても、行った先の職員室には席がないこともありました。ずっと定年年齢も女性の方が低かったのです。私は平等になりますように、と四十一年間頑張ってきました。



山室恒民が最も晩年描いた、救世軍の社会活動を描いた絵。鍋会社を託す父の思いが描かれています。

とつくりました。喜んで使ってくれているのは、子育てが終わって絵を描き始めたような方です。

児島虎次郎に師事していた父は、祖父の反対でプロの画家にはなりませんでしたが、ずっと絵を描き続け、小学校の校長を最後に定年退職後は、地元の高校などで美術の教師として勤め、八十九歳で亡くなるまで絵を描き続けました。没後四年目に地元の新見美術館で油絵展ができたことは、家族にとっても喜びでした。私も絵を描くことが好きです。

なので、今でも年に一枚は描くようにしています。今年九十一歳になります。これからは、きつとまわりの人にお世話になることも増えると思います。できるだけ毎週礼拝を守り、家族のために祈り、これからは健康が守られるかぎり、お声をかけていただければ、できることをさせていただきます。と思います。

(日本基督教団 高梁教会所属)

キトリ

ご住所

ご氏名

私の近くの救世軍を紹介してください。
□キリスト教についても知りたいです。
□『ときのかえ』の購読を申し込みます。

この部分を封書か葉書に貼り、裏面の救世軍にお送りください。